

中野 浩 (著)

IBD がわかる 60 例 炎症性腸疾患の経過と鑑別

牧山和也

特別医療法人春回会井上病院

本書は、炎症性腸疾患 (inflammatory bowel disease; IBD) の診療と研究をめざす者だけでなく、IBD 専門医にも必読を勧めたい著書である。

潰瘍性大腸炎は約 135 年前に、クローン病は 78 年前に初めて報告されているが、いまだ原因不明で若年者に発症のピークがあり、人生を左右しかねない難治性疾患である。当然のことながら基礎的研究は細菌学的、免疫学的、遺伝子学的研究を主体に著しい進歩がみられるが、いわゆる disease history からみた探究は極めて少ない。本書は、治療と長期経過から病理学的所見を加味し disease history を詳細に観察した正に臨床研究論文である。

<本書の構成の概要>

1. 症例数は、IBD とその関連疾患の計 70 例が掲載されている。クローン病が 28 例 (うち参考症例 3 例)、潰瘍性大腸炎が 16 例 (うち参考症例 1 例)、大腸結核が 10 例 (うち参考症例 2 例)、その他、鑑別を要する疾患 (アフタ様大腸炎、アメーバ性腸炎、虚血性大腸炎、腸型 Behçet 病、腸間膜脂肪織炎、Cronkhite-Canada 症候群、cap polyposis など) が 16 例 (うち参考症例

4 例) である。

2. 症例の経過観察は、注腸と小腸 X 線画像を主体に呈示されている。その他、簡明な病歴と内視鏡、切除標本、病理組織 (生検、切除腸管) の画像と簡潔な考察によって構成されている。その中でも X 線画像が 277 枚 (49%)、内視鏡画像が 148 枚 (26%)、病理組織画像が 88 枚 (16%)、切除標本画像が 40 枚 (7%)、その他が 7 枚 (1%) と主に造影 X 線画像で経過が追跡されている。

<本書の特色>

1. 特色は、精力的な経過観察からいわゆる IBD の疾病史を含めた全体像を知ることができることである。10 年以上の経過が観察されている症例が、クローン病で 28 例中 13 例 (最長 23 年 6 か月)、潰瘍性大腸炎では 16 例中 8 例 (最長 26 年 9 か月) である。

クローン病の初期病変 (aphthoid lesion) から 5~16 年後の経過で治癒に至ったと考えられる 7 例は必見である。

2. 大腸の炎症性疾患の診断と経過観察には内視鏡検査が主流の昨今、X 線造影検査が極めて重要であることが示されている。内視鏡検査と違

い X 線造影検査からは病変の分布と広がり (範囲)、腸管壁の異常 (病変の深さ、浮腫の程度、壁の硬さ、軟らかさ、変形、皺襞の異常、腸管の短縮など) を的確に捉えることができ、鑑別診断と経過観察に必須であることをあらためて認識させられる。

疾患の特徴を一次元で呈示した教科書的な著書が多い中で、精力的に長期にわたり資料を蓄え経過を追及した著書は極めてまれである。著者の執拗なエネルギーが感じられる。

クローン病でアフタ様病変から治癒したと考えられる症例、あるいは典型像に進展した症例の病像の変化過程の把握は圧巻である。詳細な経過観察の中に病因、病態追及の鍵が潜んでいることを疑わせない貴重な症例集である。したがって、繰り返しになるが、これから IBD を学ぼうとしている消化器医はもちろん、IBD 専門医にも必読の書として推薦したい。

● B5/頁 256/2010 年/定価 8,400 円 (本体 8,000 円+税 5%)

[ISBN978-4-260-01168-6]

医学書院 刊